

日記「少数意見」 ー3 テレビ
ドラマ編ー

JUN

2003年1月4日(土) 忠臣蔵

2日のテレビ東京10時間ドラマ「忠臣蔵～決断の時」をみて、9・11のテロと似ていると思った。

類似点を挙げて見よう。いずれも多人数かつ組織的で、時間をかけて周到に準備された決死の行動だ。動機については、忠臣蔵は主君の無念を晴らすということで、9・11は（多分）イスラムの西欧に対する積年の恨みを晴らすことで、似ている。効果についても、その結果なにかを得ようという意図は希薄で（忠臣蔵においては、浅野家の再興はなく、吉良家が滅亡するわけでもない。9・11も、あれで米国が滅びるわけではなく、打撃は象徴的なものだ）、行為自体が目的である純粹行動のようにみえる。大衆の反応はといえば、いずれも事件の直後から賞賛され（9・11はイスラム圏において）、行為者もそのような反応を予想し、もしくは、そのような期待に応えるべく行動したようにみえる。

似ているからどうだというわけではないが、9・11が理解しやすくなるかもしれない。

もっとも、私は忠臣蔵は好きになれない。忠臣蔵をルーツにもつといわれるヤクザ映画は好きだが、両者には根本的な違いがあると思う。忠臣蔵は集団の行動を描く。集団への帰属が大きなテーマとなる。ヤクザ映画は集団と個人の葛藤を描く。個人の価値観が集団のそれと異なれば個人は集団に逆らうことがあるし、一致する場合にも行動は集団の力を頼らない。昭和残侠伝の高倉健は、はやる組員をなだめて一人で殴り込みをかける。そこで行き会う池部良も、高倉とは違った動機で行動を共にする。

正月にまとめて観ようと思って借りてきたビデオの中に「ブリジット・ジョーンズの日記」があった。面白い映画だったが、日本人はcruel raceだというセリフにひっかかった。ある男が日本人の女に裏切られたという話だが、別に日本人にこだわる場面ではなかった。映画自体も他に人種を揶揄するような場面はなかった。唐突だったので不思議に思った。

忠臣蔵を観てからもう一度あのcruel raceという言葉を出すと意外と抵抗がなかった。正月に10時間の殺戮劇を観る人種は変なのかもしれない。

2003年12月4日(木) ビギナー

司法研修所を舞台にしたテレビシリーズで面白い。

男女4人ずつの修習生がグループで研修所の課題に取り組んでいく。一流の法律事務所が監修しているので結構勉強になる。

番組評ではあまり芳しくないのだが、日本ではあまりこの手のドラマは受けないのだろうか。議論が多く時にはかなり厳しい発言もある。堤慎一が財務省を不祥事で退官した元高級官僚の役で出ているが、彼には「ずっとエリートできたやつには弱者の気持ちなどわからない」という言葉が浴びせられる。司法修習生は半分学生のようなものだけど、社会人だった人も多く互いに学生同士のように気楽に話せるわけではない。現実の修習生はあそこまで突っ込んだ会話はしていないだろう。だから評者からはリアリティーがないと言われるのだろう。

確かに、激しい議論をして険悪な雰囲気になり、どうなるのだろうと思っていると次の場面では仲直りしている。現実はあるふうにはいかないなと思う。しかし、日本語で聞いているから議論が激しく感じるのかも知れない。あれを英語でやればよくある普通の会話だ。アリーマイラブではもっとすごい言葉が飛び交い時には訴訟にまでなるが、それを変だとは思わない。

自分でも英語で話しているときは別な人格を感じる時がある。日本語だったらここまでは言わないなというようなことを平気で言っている。そして議論が終ると笑顔で握手している。

2005年1月18日(火) 深田恭子

「下妻物語」で感激して、深田恭子の過去の作品を観ようと思った。彼女に初めて注目したのは北野監督作品「Dolls」で（この映画については2002年10月22日に感想を書いた）、それまでは関心がなかった。深田恭子が演じた「Dolls」の歌姫はそのファンが命を投げ出してもいいと感じるほどの存在で、地上界にはいないような人でなければならない。その意味で北野監督のキャスティングは見事だった。

しかし、深田が出演したその他の映画やテレビドラマにはあまりいいものがなかった。その多くが、あまり頭の良くない、気が強い、わがままな女の子の役で、全く彼女の個性を生かしていなかった。

そして、最後に深田恭子のテレビドラマの最初の作品である「神様、もう少しだけ」（1998）にたどり着いた。彼女が演じるのは、HIVに感染した援交女子高生で、これで見ただけのテレビドラマの役柄と同じようだな、と思った。でも、ストーリーが面白く、9話を2週間で観てしまった。1週間おいて、TSUTAYAからビデオのVol.4を借りた。日曜日の夜、一人で部屋のテレビで観はじめた。

一気に、物語の世界にひきこまれ、気がつくまで泣いていた。難病ものは好きではなく、感動したこともなく、まして泣いたことなどない。泣かせるような話は、簡単に見破れ、感動などするわけがない、と思っていたのだが・・・。

「神様、もう少しだけ」のストーリーは奇をてらったものではなく、むしろオーソドックスな感じがした。次の場面を予想するのも困難ではなかった。しかし、予想どおりの展開でまた泣かされてしまう。翌朝かがみを見たらまぶたが腫れ上がっていて、濡れタオルで30分も冷やさなければならなかった。

こんなに映画で泣かされたのは初めての経験で（現実でもない）、歳をとって涙もろくなったのかな、とため息をついた。ヤクザ映画の男気に感動して泣くことはあっても、女子供のように（！）お涙頂戴のテレビドラマに泣かされるとは思わなかった。

冷静になって、少し分かってきたことは、「神様、もう少しだけ」は、ただ泣かせるだけのドラマではなく、もっと硬派の内容を持っているのではないかということだ。つまり、このドラマで深田恭子は毎回何度も泣くが、決してナヨナヨ泣くのではなく、怒りながら泣いている。彼女は泣きながら高校の卒業式の後演壇に登り自分がHIVに感染していることを告白しそれでも自分らしく強く生きていくことを宣言する。就職が内定した会社にもHIVのことを告げ、内定を取り消されてしまう。そう、彼女は自分の信念を愚直に貫いて、傷つき、それでも強く生きようとする。

「神様、もう少しだけ」は、「下妻物語」の桃子の話の裏面ではないか。「下妻物語」では、桃子が、高校の教室で皆から離れて一人で弁当を食べている姿が描かれている。イチゴが「友達がいなくて寂しくはないのか？」と訊くと「全然」と答える。「下妻物語」は桃子の日のあたる強い一面を描いているが、その裏には「神様、もう少しだけ」に描かれる涙にまみれた姿があるのだろう。そして、この陽と陰の二つの顔が深田恭子の中にもあるのではないか。深田恭子は、苦悩しながら、「神様、もう少しだけ」の叶野真生のように今の一瞬を一生懸命生きようと思ったり、桃子のように「気持ちが良いればOKジャン」とつぶやいたりしながら、大女優への道を着実に歩んでいるように思える。

2005年3月9日(水) 富豪刑事

「富豪刑事」の神戸美和子は「下妻物語」の竜ヶ崎桃子と同様に浮世離れしたキャラクターだが、見かたによっては180度違った人格なのかもしれない。それは他人とのかかわり方を見ると分かる。

桃子は、友達が一人もいなくても寂しくないと言うように、強い（または強く見せている）。その強さの中核を成すのは他人と自分を峻別する哲学（ロリータ道）であり、それを捨ててまでして他人に迎合しようとはしない。自分の生き方を守るために他人を遠ざける傾向がある。

美和子は、大富豪の孫娘であることを隠そうとはせず、自然に大富豪しているため、周囲から反発を買っている。しかし、美和子は生来の善意からそれに気づかず、みんなが自分に好意を持っていると信じている。美和子は性善説に基づく哲学を持っていて、それが犯人を前にしての「愛の説教」になり、その的外れさが失笑を買う。それでも美和子は「本当に悪い人はいない」という信念を持って刑事の仕事に励む。

桃子も美和子も、何れも現実にはいないような人物で深田恭子以外には演じられないような役柄だ。では、それがはまり役というだけで片付けられるかということ、そうではない。深田恭子は前述のように両極端とさえ言える二つの人格を演じ分けているのである。

深田恭子はこれまで、等身大の女の子（純粹だがワガママであり頭が良くなく、いつも自分の生き方を模索している、といったタイプの）を演じていたが（それはそれで成功していたが）、他の若い女優に演じられない役ではなかった。

桃子と美和子を演じるためには、メルヘンチックな要素があるというだけでは足りず、浮世離れた言動を支える強い哲学が必要になる。それは役柄として作られたものではなく、深田恭子が本来持っていたものだ。

非現実的な世界を現出させるためには特別な力が必要で、宗教の教祖が奇跡を起こすか起こしたように信じさせる力に似ている。「富豪刑事」の何れも個性的で濃い役者の中で、美和子が「あのう・・・ちょっとよろしいでしょうか？」と言うとき、回り舞台のように世界が一変して輝きを帯びる。すごい役者だと思う。

2005年3月15日(火) 富豪刑事 第9話

第9話は「勃発・・・スクールウォーズ！決死のラグビー対決」というタイトルで昔のテレビドラマ「スクールウォーズ」のパロディーだった。この「スクールウォーズ」は実話に基づいて、その話をNHKのプロジェクトXでやっていた。これは「ツッパリ生徒と泣き虫先生」というタイトルだ。

私は、前のテレビドラマも実話の方も何れも知らなかったのだが、富豪刑事はとても面白かった。プロジェクトXの方は後味が悪かった。30年前に不良が集まる京都伏見工業高校のラグビー

部に元全日本ラグビーの先生が赴任して荒廃した部を立て直し全国優勝2回の強豪チームに育てる話だ。その先生と元生徒たちが登場して感動的な話をするということなのだが、自己陶醉の自慢話を聞いているようで気持ちが悪くなった。このプロジェクトXという番組は以前から敬遠してみたことがなかったがやはり想像していたとおりの内容だった。

富豪刑事はというと、ラグビーコーチ襲撃事件の犯人がラグビー部を退部になった不良高校生の中にいるのではないかという設定で、美和子が高校を作りそこに特待生として不良たちを入れようというのだ。そこに鎌倉警部がコーチとして乗り込む。鎌倉警部役の山下真司は「スクールウォーズ」に出ていたとのことでファンにはたまらない配役だったろう。私は全くそのドラマを知らなかったが、富豪刑事だけで結構感動してしまった。深田恭子のセーラー服が良かったこともあるが、物語として良く出来ていた。このシリーズは何人かの脚本家が書いているようだが、傑作だった第5話（ホテルの富豪刑事）とこの第9話は同じ人のようだ。複雑な内容を手際良くまとめ、筋の通った話を作っている。

この第9話を観て「武蔵 MUSASHI」と比べたくなった。両方とも本来のストーリーを持っていて、そこに別なストーリーをはめ込んでいる。今度の控訴理由書でこれを「嵌め込型模倣」と私は命名した。そのような模倣がパロディーとして独自の価値を持つのか、単なる話題作りの模倣なのかはその内容で決る。原作となるテレビドラマを知らない私を感動させた富豪刑事の脚本はすごいと思う。「武蔵」がどうだったかに付いては言わずもがなだ。

2005年3月23日(水) 富豪刑事 最終回

「富豪刑事」についてはもう書かないつもりだったが、最終回がとても良かったのでまた書きたくなった。

最後の場面で、ニューヨーク、パリ、上海と世界の都市にサクラの花びらのように風に乗って運ばれて、空を覆う一万円札。幻想の世界だ。何百億円もの金を使い、美術品を買い、会社を作り、高校を建てた「富豪刑事」の最後の金の使い方がこれだったとは！雪のように降る札を見て、喜久右衛門が「きれいじゃのう」と言うと美和子は「お金じゃなくて、本当の雪だったら良かったのに・・・」とつぶやく。

最大の散財が雪にかなわないという皮肉。マネーゲームにうつつを抜かず昨今の日本に向けられた言葉のようだ。前9話を思い返すと、全てがこの結末を描くためにあったように思える。三島由紀夫の「豊穡の海」の最終章を思い出した、と言ったら誉めすぎだろうか。

喜久右衛門と瀬崎龍平の対決も見事だった。美和子のやさしい言葉に復讐心が揺らいだ瀬崎は、窮地に陥った喜久右衛門と美和子を助けにロールスロイスで登場する。危機が去った後喜久右衛門は瀬崎を見つめて「はて、あなた、どなた？」と問う。瀬崎の50年にわたる喜久右衛門に対する恨みは（それは瀬崎を裏世界の巨魁にした力だった）全く喜久右衛門に通じていなかったのだ。これには笑った後、人生の無常を感じた。一生かけて作り上げた財産とか権力はなんの意味があるのだろうか。人生とは、雪のように不確かではかなく、でも美しいものかもしれない。

2009年8月31日(月) 任侠ヘルパー

草薙剛（翼彦一）が組幹部登用試験のため介護施設に送られるというテレビドラマ。コメディィーにしかならないような設定だが重厚な人間劇になっている。

ヤクザと介護施設には何も共通点が無いように思えるが、このドラマを見ているとヤクザと介護施設の老人は何れも明日が分からないという点で似ていることに気づく。

介護施設には日常的に死があり、それを社会は見ないようにしている。それはヤクザが社会から疎外されている状況と似ている。

草薙は、粗暴で暗く冷たい目を持った彦一を、いつものいい人キャラとは別人のようにリアルに演じている。そんな彦一も、老人たちに接しているうちに優しさを垣間見せるようになる。その変化が感動的だ。

今、第八話が終わったところだが、物語は悲劇的な結末に向かって突き進んでいるようだ。どのように終わるのか気になる。

2009年9月19日(土) 任侠ヘルパー その2

介護をテーマにドラマを作ろうとすると、老人や障害者が団結して権力や大組織と戦い、それを支援する善意の人々がいる、というような話になりがちだ。この手の物語のネックは偽善だ。それを克服しないと感動する作品にならない。

「任侠ヘルパー」の脚本家が試みたのは弱者に絡むのが「悪」という構図であまり例がない。翼彦一は、老人などから金を巻き上げる振り込め詐欺を生業としているヤクザの組長で、介護施設にいる老人の敵だ。

昔のヤクザ映画でも、ヤクザが弱者を助けるという話は普通にあって、公害企業と対決するというのまであった。しかし、それらのヤクザは映画の中では侠客と呼ばれていて、博打以外の悪事は働かない。だからやはり偽善臭が漂う。

翼彦一は、侠客ではなく、善人であると思われることを極端に嫌う。偽善者の反対の偽善者として描かれていて、いい人だと思われることに気恥ずかしさを覚える。

そのような彦一が、止むに止まれず正義を行ってしまうところに、いわゆるヒーローとは違った感動がある。もともと任侠道を実践するという意識はなく、仕方なく入った介護施設で働くうちに介護の問題に直面する。それは自分自身の生き方の問題でもある。

最終回も解決策を示すことはなく、彦一は組を捨て、一人になる。ヘルパー研修で学んだのは本当の任侠道なのか。それはまだ分からない。続編が示唆される終わり方だった。いずれにしても、道を見つけるのは難しい。誰にとっても。

2010年5月8日(土) CHANGE

ちょうど2年前の月9のドラマ。キムタクが35歳で首相になるという話。

TSUTAYAでDVDを借りてはじめて観たが、面白かった。

何故観たくなったかという、今の現実の首相があまりにもひどいので脳内でCHANGEしてみたかった。またキムタクを小泉進次郎に置き換えるとどうか興味があった。

内容については不満はある。アメリカの「ザ・ホワイトハウス」なんかと比べると甘さが目立つ。キムタク首相は二つの悪の一つを選ばなければならないような、究極の選択を迫られることにはならない。

それでも十分楽しかったし感動もした。ドラマには現実の政治の世界にないものがあつた。それは若さだ。

与党も野党も第三極といわれる新党もほとんどが60歳以上の人間が率いている。それだけでうんざりする。

ドラマを観ていて思ったが、35歳が国を率いることは出来る。政治に経験が必要だというのは多分間違いだ。特に今日のような変革の時代には過去の経験は返って弊害になる。

弁護士の世界でも60代で変化についていっている人は少ない。専門職でもそうだから、守備範囲の広い政治家だったら過去の経験などほとんど役に立たないだろう。

私が大島渚の「戦場のメリークリスマス」の仕事でロンドンに行ったのは35歳のときだった。映画の国際共同製作契約なんて初めてだったが、何とかあった。

ドラマや映画には先見性があると思う。オバマが大統領になれたのも、「24」でデイビッド・パルマーという大統領が登場したことが大きく貢献していると思う。あのドラマを観ていて、最初は黒人の大統領に違和感があった。しかし、それはすぐ打ち消され、黒人であっても何の問題もない、と思うようになる。

キムタクの首相についても同じだ。ドラマが終わるころには、なぜ現実の日本にはこんなにはつらつとしたエネルギッシュな首相がないのかと思うようになる。35歳という年齢は全く問題にならない。

このドラマを観た人は、小泉進次郎が29歳で自民党総裁になり、次の総選挙で首相になっても変だとは思わないだろう。